

3・11 後 を生きる

多くの「なぜ」向き合って



防災・危機管理ジャーナリスト

渡辺 実さん

わたなべ・みのる 1951年生まれ。35年以上にわたり、国内外の被災地を取材し、防災対策の提言を続ける。株式会社まちづくり計画研究所代表取締役所長。「都市住民のための防災読本」「高層難民」など著書多数。

生き抜く

大川小の悲劇の教訓

あつたのかを全国五十カ所以上で伝え続けています。

この悲劇には今なお、多くの「なぜ」があります。児童が「山へ逃げつべ」と言ったのに

「行ってきますと言つたら、必ず大きな声で、ただいまと言ふこと、それがボウサイです」。

宮城県石巻市の佐藤敏郎さん(53)は、子どもたちや教育関係者らに生命の大切さを語り継いでいます。東日本大震災から間もなく五年。佐藤さんは、児童七十四人と教職員十人が犠牲になった同市の大川小学校で、当時六年生の次女みづほさんを失いました。「行ってきます」と家を出た後、「ただいま」と帰ったのはこなかつたのです。

学校管理下の児童を襲つた悲劇。佐藤さんは中学教師を今年春に退職した後、大川小で何が

△震災後に市教委が改訂した「防災の本」に大川小の悲劇が触れられていない。

何が起き、なぜ犠牲になつたのか、遺族は事実を知りたいだけなのです。被害児童二十三人の遺族は宮城県と石巻市に損害賠償を求めて仙台地裁に提訴し、解明を法廷に託しました。

佐藤さんら遺族はフェイスブックやツイッター、メディアを通じて多くの疑問を発信しています。学校管理下で起きたことですから、裁判の被告ではなく教育者として、知り得た事実を全

2011年3月の東日本大震災後、泥の中から見つかった大川小児童のランドセル(左)と、津波で多くの児童が犠牲になつた大川小=2014年2月、宮城県石巻市で(コラージュ)



て明らかにするべきです。それこそが、生存教師が再起するためにもなると思うのです。

せん。

一方で「忘れないから静かにしておいてほしい」「裁判で決着をつければいい」という遺族がいることも事実です。こうした現実を踏まえ、佐藤さんは話します。「想定外の地震・津波が起きたことは二度と繰り返してはいけない。絶対にあってはいけない。絶対にです」

悲劇を繰り返さないために私たちは何をするべきなのか。

※私の連載は今回で終わります。知つてほしかったのは、地震や火山、異常気象など天地動乱の時代を生きている私たち

は、突然、被災者になる恐れがあり、国の支援策の多くは被災者に優しい制度ではないということです。被災時に困惑するばかりではなく、その状況を乗り越える最低限の知識と覚悟を持つていただきたい。「その時」に備えて少しでも役立つ情報が発信できれば幸いです。